

卒業論文の要旨

論文題目	農耕文化における冬と祭祀 — 西欧と日本の事例の比較研究 —
氏名	上月涼平
メジャー	文化人類学
(要旨)	
<p>農耕民にとって冬は厳しい季節であるが、その時季に行われる祭祀には、どのような意味や機能があるのだろうか。農耕社会における農耕儀礼や祭祀についての先行研究文献は数多く存在し、それらの多くは事例ごとに詳細な記述や分析考察がなされているものであるが、しかし「冬と農民たちとの関わり」に注目し、それに関する祭祀を事例ごとに取り上げ、その意味合いや機能について掘り下げた研究は未だ少ない。本研究では、冬の祭祀に頻繁に登場する、来訪神、ドラゴン退治祭り、オロチ退治の神楽、柱を立てる祭祀、聖婚や薬草に関連した祭祀などを取り上げ、特に西欧と日本の事例を対象として、比較研究を行うものである。</p> <p>本研究では冬とその時季にまつわる祭祀を、まずその意味合いから、冬を耐える、冬を斃す、冬の終わりを祝う、その後を訪れる春の恵み、という四つの特徴との関連から分類し、農耕文化の人々にとっての冬について、西欧と日本の諸事例の比較考察を試みた。西欧と日本の事例については文献研究に加え、日本ではフィールドワークを実施して参与観察や聞き取り調査を行い、その意味や機能の共通点や類似点について分析考察を試みた。</p> <p>その結果、一見すると、キリスト教という一神教の西欧文化と多神教の日本文化には共通点が少ないように考えられがちであるが、厳しい冬という苦境の中で、来訪神によって共同体の秩序や統合を維持し、怪獣退治によって冬の終わりを願い、柱を立てて豊穰を祈願し、そして春の象徴を取り入れた祭祀によって、春の訪れを祝うという共通点が双方の文化において見られることが明らかになった。これは地理的に遠く離れていても、異なる人種や民族であっても、同じ自然環境の中にあっては類似した慣習や文化を持ち得るという環境決定論にも近いものがある。しかし本論での主旨は、文化進化論や社会進化論のような、従来の文化人類学における極端な理論的思想や、自らのものが最良で最先端の文明とする自民族中心主義や排他的思想を支持するものではなく、私たち人間は苦境の中で似た願いや思いを抱くという、むしろ人類の共通性や普遍性についての確認作業を行ったとも言えるものである。本論文では農耕文化における冬の祭祀の比較研究からは、その点を明らかにすることができたのではないかと考えている。</p>	
(指導教員の推薦のコメント)	
<p>本論文は、従来の農耕儀礼研究ではあまり注目されてこなかった農耕民にとって厳しい季節、すなわち特に冬に行われる祭祀に注目している点で独創性がある。またその西欧と日本の多くの具体的事例を比較検討することにより、農耕文化における冬の祭祀の意味と機能の共通性や類似性を明らかにした点は学問的にも評価し得ると考える。</p>	